ロビンさんの音楽エッセラピー③

Very Small Sounds

「とても小さな音」

どんぐりがひとつ森の中で落ちる、
A single acorn dropping in the forest,

風が野に広がるススキをゆらす、
Breeze brushing over fields of pampas grass,

池に広がる波紋、
Ripples in a pond,

朝早く飛び立つ鳥の羽ばたき、
Bird' s wings in an early morning flight,

夜に降る雪、
Night falling snow,

空を満たす輝く星、
Sky full of twinkling stars,

焚き火の上でコトコト煮えるスープ、
Pot of soup simmering on a wood fire,

窓辺に灯るキャンドルのあかり、
Candle burning by the window sill,

ブランケットに包まれて
Baby all bundled up in a blanket

ぐっすり眠る赤ん坊の寝息…
Sound asleep…

●ロビン・ロイド（ミュージシャン・音楽セラピスト）
イリノイ州（USA）出身。大学卒業後、アジアを拠点に活動。50カ国以上を旅し、そこで出会う原生林や熱帯雨林、山や川、砂漠、鳥の声、動植物などからインスピレーションを得る。カリンバ、笛、尺八、三線、パーカッションなどさまざまな民族楽器に囲まれ、マルチ・プレイヤーとしての評価が高い。お年寄りや障がいのある人たちのための音楽セラピーの実践と普及にも努めている。
http://www.robbin-muse.info/index.html

石田教授のコミュニケーション モノローグ③

一人ぽっちもいいですが…

数年前、関東地方のある町で、焼肉屋に入ったら、テーブルが壁につけておいてあって、一人ずつが壁に向かって食べる形式なのです。焼肉やすき焼き、しゃぶしゃぶなどは、「テーブルを囲む」という言葉がある通り、仲間や家族と言葉を交わしながら楽しく食べるものだと思っていた私には、とてもショックな光景でした。

その後、若い大学生の趣味が「一人カラオケ」と言っているのに出会った時もショックでした。カラオケこそたくさんの人で盛り上がるものだと思っていたら、人に気を使いながら待ったり、歌ったりするより、一人で好きな歌を好きなだけ歌うほうが、よっぽどすっきりすると彼は言うのです。

そうこうするうちに、最近、一人用のカラオケボックスが営業を始めたというニュースに出会いました。一般のカラオケ屋さんで、「何人ですか」と聞かれて「一人です」というのは、やっぱり恥ずかしいと見えて、一人カラオケを望むお客さんのニーズに応えたものだとか。営業ベースに乗るくらいニーズがあるのです。

もっとひどいのが「便食」という言葉。にぎやかな学生食堂で一人で食べるより、トイレの個室でお弁当を食べるほうがいいという学生が増えているのだとか。一人ぽっちの孤独な姿も時には美しいものですが、ここまでくると、どうかと考えてしまいます。

焼肉やカラオケはコミュニケーションのいいツールになります。それを一人で楽しまないでほしいものです。

●石田 易司（いしだ やすのり）
桃山学院大学社会学部社会福祉学科教授。1948年生まれ。京都府立大学文家政学部卒業。京都府立木津高等学校教諭を経て朝日新聞社入社。厚生文化事業団で社会福祉・青少年育成事業を担当。1998年から現職。その他、大阪市いきいきエイジングセンター館長、大阪市ボランティア情報センター所長、日本キャンプ協会常務理事、日本福祉文化学会副会長など。

Column 連載エッセイ

ゆきえ先生の明るい教室出席簿③

礼儀正しく、お話好きな好青年・谷本淳二君

谷本淳二君はダウン症ですが、陽気でお話好きな礼儀正しい青年です。普段はニコニコしていますが、書く作品によっては、誰も近寄れない雰囲気をかもしだします。エプロンをして、気合いを入れて、何か呪文みたいな言葉を発して、おもむろに書きだします。私が何かで注意してもまったく無視。完全に自分の世界に入り込んでいます。自分というものを持っているからこそ、いい作品（書）が書けるのだと思います。

帰る時は、必ず「先生、夜ですからお車の運転お気をつけてお帰りください。今日はどうもありがとうございました」と、ていねいにお辞儀をして自転車で帰ってゆきます。その言葉づかいのていねいなことに、いつも感心しています。

９年前（教室を始めて１０ヶ月の２００３年２月）、初めての彼らの作品展でのこと、半紙に縦書きで「夢」という一文字を書いた作品が最初に売れました。淳二君の作品でした。額にも入れず、無造作に1ヶ所をピンで留めてあっただけの作品です。しかも、「夢」は「夢」でも横線が1本足りません。でも、あえて展示しました。とてもいい字でしたから……。たとえ、線が1本足りなくても「夢」は「夢」。淳二君やご家族の方はもちろんですが、それ以上に嬉しかったのは、私でした。この出来事があって、教室の存在に自信が持てたのですから……。最初にして、確かな手応えをつかむことができた作品展でした。淳二君、ありがとう！です。

●山下 雪枝（やました ゆきえ）
書道教室「蛍」主宰。1949年生まれ。書家・古谷蒼韻に師事するも33歳の時に変形性股関節症のため右足を手術、約1年の入院の後、松葉杖の生活となり師事を断念。10年間の痛みとの闘いの後、1994年より書や墨アートの創作のかたわら自宅で書道教室を開く。2002年より豊中市蛍池公民館で書道教室「蛍」を主宰。10年にわたって知的障がいのある人たちと歩み続けている。

木島英登の空飛ぶ車イス③

拍手と握手の嵐！バングラデシュでスターになる。

現地の人との交流。言葉は通じなくても、心が通じた瞬間は至福である。バングラデシュの地方都市クルナ。首都ダッカに戻る夜行列車の出発まで、映画館で時間をつぶすことにした。テレビのない家庭も多く、映画は娯楽の王様。単純明快、勧善懲悪のストーリーは誰もが楽しめる。

外国人がとても珍しい国。日本人も初めてみるなら、車イスも注目の的。すぐに人だかりができる。何事かと映画館のオーナーが挨拶にきた。机と椅子が運ばれ、チャイ（甘いミルクティー）とお菓子をいただく。お礼に鶴を折ってプレゼントすると大喜び。映画は無料招待となり中央の特等席へ。階段も皆でひょいひょいと担ぎあげてくれた。座席でも注目の的。握手を求める人までいる。こうなりゃ、スターになってやろう。劇場に流れる音楽に合わせ、両手を振りながら踊り、観客の視線に応える。ノリのいい私に観客は拍手喝采。

映画のヒロインの一人は、肉付き豊かだった。日本とは美人の定義が違うのが面白い。ただし肝心のお色気シーンは、画面が真っ黒になる。キスシーンですら検閲でカット。私も皆とブーイング。外国人の私も一緒になって楽しんでいる姿は現地人をニヤニヤ喜ばせる。幸せオーラが劇場を包みこんだ。

●木島 英登（きじま ひでとう）
ビッグ・アイ国際交流アドバイザー。
世界100ヶ国以上を訪問。車イスの旅人。
http://www.kijikiji.com/

ビッグ・アイ BIG-i
発行・編集：ビッグ・アイ共働機構　国際障害者交流センター ビッグ・アイ　i-co編集事務局
〒590-0115　大阪府堺市南区茶山台1-8-1
TEL:072-290-0962　FAX:072-290-0972 http://www.big-i.jp/
発　行　日：2012年1月10日